

- 問一 ①老練 ②等式 ③ほこさき ④参詣 ⑤そこ(なつて)

⑥はぐく(まれ) ⑦よそお(う) ⑧樹立 ⑨のぞ(む) ⑩偏狭

問二 母語以外の言語との比較により母語の特質を認識してはじめて、母語がどういいう言語であるのかを知ることができるということ。

問三 実際には絶対的・普遍的なものではないにもかかわらず、それに疑問を抱かずに無条件に認めることができれば、ということ。

問四 息子の、名前を入れ墨にするほど情熱的であった父親の若き日の恋に思いをさせ、父をひとりの男として相対化し、自らと重ね合わせるような心情。

問五 西欧自然科学観を絶対的で普遍的なものとして無条件に規範とするのではなく、さまざまに存在する個別文化のひとつとして相対化した上で、同じく個別文化のひとつである日本の自然観をあらためて見つめなおすということ。(一〇二文字)

問六 c

- 問一 男 1人 女 1人

問二 ア 完了(強意)の助動詞「ぬ」未然形+推量の助動詞「む」終止形

イ 他に対する希望を表す終助詞

ウ 強意の係助詞

問三 I 若小君は塗籠の前に腰を下ろして話しかけなさが、女はろくに返事もしない。

II 若小君が元服前の子供の姿でもあったので、女はちょっと気安い感じがしたのであろうか、
III 私の親は世間に誰と知られることはない人だったので、私があなたに申し上げたとしても、お知りにはなられ
すまい。

問四 若小君が、家の中に身を隠す女を山の端に入る月に喩え、女の姿を見失って嘆く自分を、光も見えぬ闇に迷って宿もな
く途方にくれる旅人に擬えて、女に会いたいと訴えかけている。

三

問一 a もとより b なんぞ(いかにして) c すなわち d すなわち e なかれ

問二 (1) きみただいれ(はいれ・いれば・はいれば)、まさにおのずから(みずから) しょうそくをうべし(えるべし)。

(2) あなたはとにかく入りなさい。必ず自然に(自分で) 情報を得ることができはるはずです。

問三 とても驚いたが、逃げ去ることのできるすぎがなかった。

問四 (1) 中丞は封を開くと、突然顔色を変えて中に入った。

(2) 手紙で食欲さを暴露され、脅迫されていたから。

問五 (1) さもなくば、某月某日に奥方が真夜中に寝ている時、髪を三寸切られていたはずだが、どうしてこれを忘れてし
まったのか。

(2) いつでも殺しに来ることができると示して脅迫するため。